

暮らし観光マップ

しおた

うれしの



TAKE FREE

嬉野市



歩いて探ろう！
しおたの暮らし

子供から70代まで、総勢30名を超える地域内外のメンバーでまち歩きをしながら見つけていきました。スタート&ゴールは、塩田津まち並み駐車場です。



暮らし観光マップとは

この地図は、嬉野市にある塩田エリアを「暮らし観光」の視点で楽しむマップです。「暮らし観光」とは、その土地ならではの暮らしに触れ、地域の見過ごされがちな風景や文化を再発見する新しい観光スタイルです。今回の地図で「発見」されたスポットは、2026年1月12日に行われた「しおたローカルツアー」でのワークショップをまとめたものです。裏面では、その際に撮られた写真とともに、真鶴出版 川口によるエッセイを掲載。塩田、そして志田焼の里エリアをこれまでとは少し違った視点で見つめ直します。

海と里、両方の特性をあわせもつまち、塩田

嬉野市東部に位置する塩田は、田んぼが広がる内陸にあるにもかかわらず「川港」として栄えたまちです。その理由は、日本最大の干満差がある有明海にあります。有明海沿岸では、干潮時に水が大きく引くため、船が接岸できなくなります。そのため、干潮時にも安定して水深を確保できる場所を求めて上流に遡り、塩田に港が築かれたのです。同時に塩田は長崎街道の宿場町でもあり、江戸時代には海と陸の交通が交差する地としてにぎわいました。塩田は、外の世界から文化や技術を受け入れる「海のまち」でありながら、田んぼや畑から生まれる内陸特有の「里山」の豊かさをあわせもつ、稀有なまちなのです。

発行元：嬉野市
発行日：2026年4月30日
企画：MOTOKO, 追沼翼
まち歩き講師：中島大貴(ナカシマファーム)
編集・執筆：川口瞬(真鶴出版)
デザイン・イラスト：刑部あゆみ(日當り)
写真：川口瞬, MOTOKO



嬉野から塩田、そして志田焼の里へ

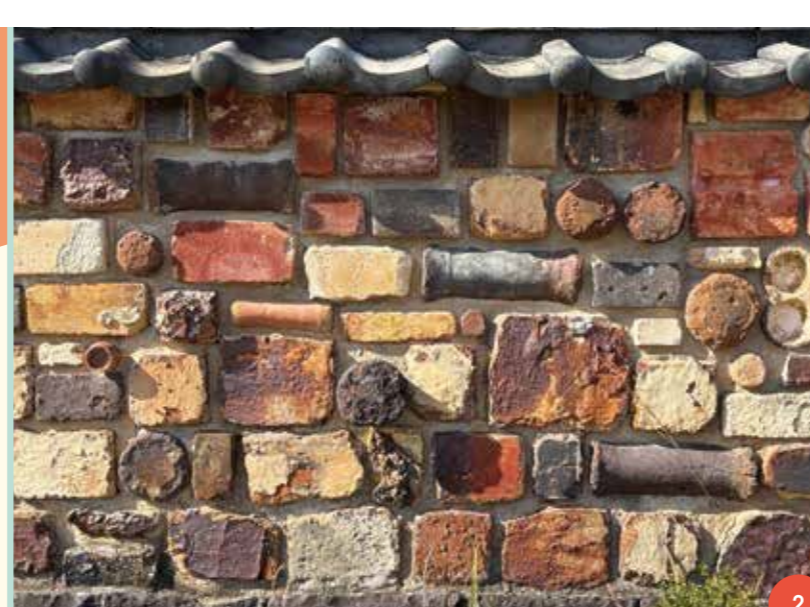
嬉野温泉街から塩田までは車で約15分。そこからさらに志田焼の里までは車で約5分。これら三つの地域はそれぞれ異なる性格をもちますが、「塩田川」と「窯業」によって強く結びついています。まず、地理的には塩田川が、山間の嬉野から平野の塩田へ流れ、有明海へとつながっていきます。もともと氾濫の多かった塩田川は、現在は上流でダムにより水量を調整することで、塩田の農業を支えています。また、戦国時代以降、この流域一帯でいち早く窯業が始まりました。江戸時代になると、熊本・天草から塩田川を通して陶石が運ばれ、それを塩田で陶土に加工し、内陸地へ運んでいました。そして、嬉野市内の吉田や志田で生産された大量の日用品の磁器は、再び塩田に集められ、各地へと出荷されていったのです。こうして、この流域に一体の経済圏がかたちづくられていきました。



探してみよう！



1 まちなかにたくさんいる恵比須さま。つくられた年代もまちまちな見える。2 焼き物が貼られた壁。「トンバイ塀」と呼ぶらしい。



6 潮干狩りのときの海のように底が見える川。7 かつてのクレーン台。船で運ばれてきた陶石などをクレーンで移し変えたという。8 棚路と呼ばれる、川へ降りる階段。



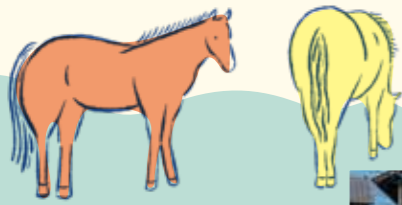
3 その大きさに驚く、常在寺の仁王像。4 常在寺の階段は高校生が部活のトレーニングで使わらしい。5 みんなが気になったポール。下水の通気口だとか。どうしてこの地域だけ.....?



9 〈UNDERSTAND〉のスパイスカレー。10 さっと食べたいときにありがたい〈岳の信太郎めん〉。11 〈MILKBREW COFFEE〉で飲む、搾りたての牛乳を使ったナカシマファームラテ。



12 トンバイ塀に焼き物でつくられた看板。13 志田焼の里博物館にはのどかな時間が流れる。14 志田の蔵では様々な地域の焼き物が買える。



暮らし観光案内人

真鶴出版 川口瞬
編集者。真鶴出版代表。神奈川県の小さな港町・真鶴を拠点に、全国を回りながら、日本まちや協会の協賛で『日常』をつくる。



仕事柄、いろいろな地域を訪れることがある。

そのきっかけの一つが写真家・MOTOKOさんで、今回塩田を訪れたのもMOTOKOさんからの誘いだ。嬉野には二度行ったことがあったが、話を聞くと、塩田は同じ嬉野市内にありながら、嬉野温泉街とは全然違うまちの性格をもっているそう。早速訪れたのは2026年1月。嬉野温泉駅でレンタカーを借りて、塩田に向かった。

魅力的な地域の三つの条件

いろいろな地域を訪れるうちに、自分が魅力的だと思える地域の条件がまとってきた。それが、地域のなかに「文脈」、「入口」、「コミュニティ」の三つがあることだ。

「文脈」とは、地域の歴史や文化を引き継いでいるか、引き継ぎ「つづいている」かどうか。その点、塩田はまさに、長崎街道沿いに江戸時代後期以来の居蔵家と呼ばれる町屋が立ち並び、それらを保存し、地域独自の文脈を引き継ぎつづけている。

ただ、塩田がもしもいろいろの建築だけではない。まちを歩くと、そこかしこに石でつくられた恵比須さまがいる。言わずもな恵比須さまは漁や商いの守り神で、塩田が川港であったことと関係している。

と同時に、実は塩田はかつて「塩田石」と呼ばれる石が採れた石のまちであり、恵比須像はその文脈を受け継ぐものでもある(ぼくが住む真鶴も石のまちであり、親近感を抱かずにはいられない)。

川沿いには石垣、そして「棚路」と呼ばれる石階段もある。これらも石のまちであった名残り、そしてかつて川と共にあったであろう生活がうかがえる。

まちに起きている変化の兆し

江戸時代には川港であり、宿場町として交通の要であった塩田も、1976年に川港としての役割を終えてからは、静かなまちになった。ただ、そんな塩田に5年前に一軒のお店ができた。それが街道沿いにある「MILKBREW COFFEE (ミルクブリューコーヒー)」だ。

もともとこの建物は正時代頃に米蔵として建てられていて、その後銀行としても使われていた。見た目はまさに蔵のまま。ただ

そこに、洗練されたデザインのソフトクリームの看板が佇む。中に入ると天井の高いカフェスペースに、奥に入れ子構造のように製造スペース(ラバスペース)が入るソリッドな空間。

このカフェを開いたのは、地元・塩田の酪農家であるナカシマファームの中島大貴さんで、「MILKBREW COFFEE」では、ナカシマファームがつくる牛乳を使ったカフェラテや、ブラウンチーズといったここでしか食べられないものが楽しめる。

「つづいてここまで建築にお金をかけたんですか?」と聞くと、「最初の一点をどこに置いたかが大事だと思って」と中島さん。事実、続くように「MILKBREW COFFEE」から徒歩数分の場所に、「Restaurant & Cafe RAKUYA」という古民家カフェができた。

その一年後には、「UNDERSTAND」というスパイスカレーのお店。これも昔ながらの外観を受け継ぎながら店内をリノベーション。トッピングにトンカツを頼むと、見た目もボリュームも大満足な一品であった。

こういった「そこにはない良いお店」は、飛距離が長い。つまり、多少離れていたとしても、わざわざその地域に行ってみようと思える「地域の入口」となる。

塩田の裏の顔? 表の顔?

さて、一般的に塩田といえば「塩田津」であり、観光マップもここで終わることがほとんどだが、今回はそうはいかない。このマップは「暮らし観光マップ」であり、いかに「観光」以外の普段の塩田まで探ることができかが肝だからだ。

そこで長崎街道を南に通り抜け、魅力的な急階段を横目に、さらにまっすぐ進む。すると現れるのが常在寺を守る「迫力満点の仁王像だ(もちろんこれも塩田石)。

常在寺の看板によると、設立はなんと奈良時代(諸説あり)。塩田が港として賑わうはるか昔からこのお寺はあったようだ。階段を上ると塩田が一望でき、この場所が昔から重要な場所であることがわかる。

今度は常在寺から田んぼの真ん中の道をまっすぐ進む。するとまたまた川にぶつかる。

実はここが本当の塩田川。塩田津にある川は「旧塩田川」であり、かつての川筋。現在の本流はこの川となっている。あまりに洪水が酷かったため、川の形が変えて、流れがより滑らかなるように変更しているそう。

塩田川から南東に向かって「瀬頭酒造」の前を通りすぎ、北に向かうと一気に田んぼが広がる。ここから見る「瀬頭酒造」と「五町田酒造」の酒蔵は、本来「裏の顔」であるはずなのに、堂々としていてカッコいい。田んぼを抜けた先には、でっかい「たこ」

が見えてくる。へたこやきまんぼうだ。近所の中学生だったら絶対に通っていたであろうその場所。道路を渡って、再び田んぼだらけの道へ。

ぐるっと回るような形で、もう一度塩田川に戻ると、「袋大橋」を渡りながら田んぼを振り返ると、中学生が石を蹴りながら橋を渡っている。平野が広がる田んぼのなかに、ポツポツと家が佇む。

観光客にとってここは塩田の裏の顔かもしれないが、塩田に暮らし人にとっては、きっとこれが表の顔。塩田はひたすら平野が続くため、夜の星空も低く感じるという。

小さな村のような博物館

さて、最初に挙げた三つの条件のうち、「コミュニティ」だけが塩田に普通に「よそ者」として訪れるだけでは感じる感じが難しかった。それは農村という地域性、そして生活商店街ではなく、かつての宿場町であったという性格もあると思う。

ところが、塩田から北に車で5分ほど走らせた久間エリアにそれがあった。「志田焼の里博物館」である。

「博物館」というと固い印象があるが、なんだかいたる所に温かみを感じる。手作りの説明書きに、小学生たちが訪れた感想文がたくさん貼ってあったり、なぜかサービスティービーがあり、金柑の甘露煮が「ご自由にどうぞ」と置いてあったり……。まるでおばあちゃんの家に遊びに来たよう。

あとからこのマップのデザイナーであるあゆみさんに聞くと、子供たちが博物館の周りの落ち葉で遊び回り(博物館の敷地は車が入れず、安心して走り回れるほど大きい)、800円から絵付け体験ができ、子連れでも大満足だったそう。しかもすぐ近くで焼き物が買える「志田の蔵」の裏では、馬の牧場も見ることができ。

今はまだ魅力が点在している塩田だが、ここからもし、遠くからでも人が訪れたいくなるようなパン屋や、本屋なんでものができたりしたら? 「見えない港」をもつ塩田には、かつて川港として外の文化を取り入れてきたように、外から来た人が自分のペースで小さなお店を開いたり、創作したりするような「暮らしのまち」が合いそう。ゆったりとした時間のなかで暮らしながら、一歩足を伸ばせば、賑わいのある温泉街にも気軽に行ける。

今は離れている「ドット」がつながり、面になる。その未来は決して遠くないように思う。嬉野温泉街とは違うまちの魅力と可能性が、塩田にはある。

